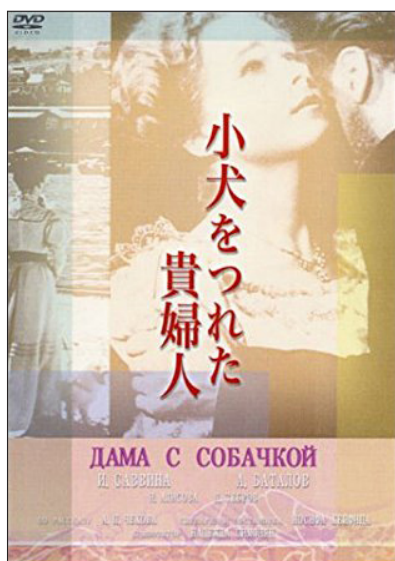


2018.4.19
vol.65

シネマ・ド・リぶらの コラム・ド・シネマ

映画
を
読む

本日の上映作品 『小犬をつれた貴婦人』



銀行員のグーロフは、避暑地で犬を連れた貴婦人アンナと出逢い心を奪われる。やがて二人の間に愛情が芽生えたが、アンナは夫の元へと帰っていった。グーロフもモスクワへ戻るが、アンナが忘れられず、妻に偽ってアンナのいるサラトフへと旅立つ。

監督・脚本：イオシフ・ヘイフィッツ

原作：A・P・チェーホフ

音楽：ナジェージダ・シモニャン

出演：アレクセイ・バターロフ

イヤ・サヴィーナ

製作：1960年 ロシア モノクロ 90分

『チェーホフ短篇集 新訳』	チェーホフ／著	集英社	983
『チェーホフ・ユモレスカ』	チェーホフ／著	新潮社	983
『かわいい女・犬を連れた奥さん』	チェーホフ／著	新潮社	983
『チェーホフの短篇小説はいかに読まれてきたか』	井桁 貞義／編	世界思想社	980.2
『チェーホフを楽しむために』	阿刀田 高／著	新潮社	980.2
『チェーホフ 七分の絶望と三分の希望』	沼野 充義／著	講談社	980.2
『現代に生きるチェーホフ』	チェーホフ没後百年記念祭実行委員会／編	東洋書店	980.2
『チェーホフの世界 自由と共苦』	渡辺 聡子／著	人文書院	980.2
『チェーホフの風景』	ペーター・ウルバン／編	文芸春秋	980.2
『わが兄チェーホフ』	ミハイル・チェーホフ／著	東洋書店新社	980.2
『私のなかのチェーホフ』	リジヤ・アヴィーロワ／著	群像社	980.2
『チェーホフとの恋』	リディア・アヴィーロワ／作	未知谷	980.2
『ロシア文学への扉 作品からロシア世界へ』	金田一 真澄／編著	慶應義塾大学出版会	980
『地図で見るロシアハンドブック』	パスカル・マルシャン／著	原書房	302.38
『朗読者』	ベルンハルト・シュリンク／著	新潮社	943.7

コラム『小犬をつれた貴婦人』

恋愛映画の美学

K.M.

今回の上映作品は、1960年カンヌ国際映画祭でチュフライ監督の『誓いの休暇』（第15回と第39回に上映済）と共に、ベスト・セレクション賞を授けられたヘイフィッツ監督の『小犬をつれた貴婦人』です。原作は、戯曲『桜の園』『三人姉妹』などで有名な、チャーホフの短編小説『犬を連れて奥さん』です。

文学作品の映画化と言えば、内容を大幅にダイジェストするのが普通ですが、この映画では、逆にチャーホフの一字一句をゆるがせにせず、文学的な筆致をそのままに、きめ細かな心理描写とリリカルな情景描写が施され、詩情と情感をこめた、豊かな映像に膨らませることに成功。世界の数ある恋愛映画のなかでも、デヴィット・リーン監督の『逢びき』と肩を並べる逸品と評されています。

19世紀末の沈滞したロシア帝国末期、クリミア半島の保養地ヤルタが舞台です。モスクワから休暇でやってきた、恋愛経験の豊富な妻子ある銀行員のゲーロフと、地方都市のサラトフから病気療養という名目でやってきた、慎ましく世慣れない若い人妻アンナが出会い、お互いに好感を抱きます。二人はお互いの満たされぬ現状を語り合い、毎日に親しみを増していきます。そして初めて結ばれた朝、山の頂上に白い雲がかかり、海が朝霧にかすむ港を見下しながら、二人はこれまでの人生で見たことのない、ほのかな光を感じます。

やがてアンナは、想いを残しながらも夫の待つサラトフに帰ります。一方モスクワに戻ったゲーロフはアンナのことが忘れられず、妻にはペテルブルグへ行くと偽ってサラトフへと旅立ちます。そして、オペレッタが上演された夜、劇場で再会した二人はかたく抱擁し、モスクワでの再開を約束します。恋情抑えがたいアンナがモスクワにゲーロフを訪ねたのは、風花の舞う冬の日でした。

こうして二人の愛は、これまでの死んだような生活に生への希望の灯をともしはしたが・・・、というこの作品に私もあまり予備知識がなく、急いで調べてみたことのいくつか紹介します。

①イオシフ・ヘイフィッツ監督（1905年～1995年）

旧ソ連、現在のウクライナ共和国生まれ。レニングラード芸術歴史大学出身。代表作は『大家族（1954年）』と『小犬をつれた貴婦人（1959年）』

②アンナ役のイヤ・サーヴィナ（1936年～）

モスクワ大学新聞学科在学中、演劇サークルに加わっていたのが縁で、本作品で映画デビュー。当時23才。優美で繊細なアンナ役を内面的に演じて称賛を浴びた。のちに舞台『罪と罰』のソーニャ、『人形の家』のノラが当たり役になった。

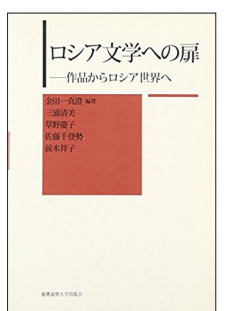
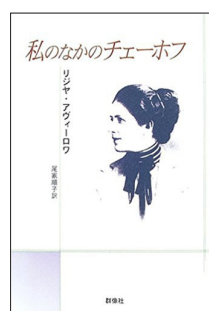
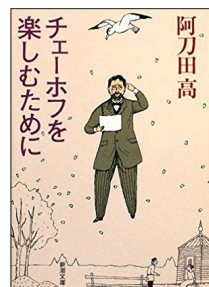
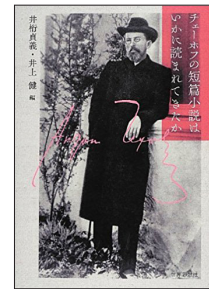
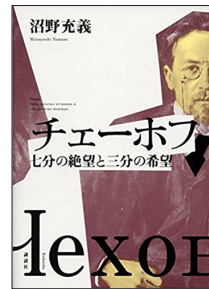
③ゲーロフ役のアレクセイ・パターロフ（1928年～）

モスクワ芸術座付属演劇学校を出て旧ソ連を代表する舞台俳優になり、映画では『鶴は翔んでゆく（1957年製作）』で、戦争下の青春を演じて国際的に名を高めた。監督作『外套（1960年）』もある。1980年から国立映画大学俳優科教授を務めた。

④オペレッタ『ゲイシャ』

サラトフの劇場に張られていたポスターのタイトルが『ゲイシャ』！19世紀末のロシアの地方都市で『ゲイシャ』とは、と調べてみると、イギリスのシドニー・ジョーンズ作曲と言われる同名のオペレッタが実在する。19世紀後半のヨーロッパでのジャポニズムの流行に乗って、ロシアでもオペレッタ『ゲイシャ』が巡業上演された史実がある。これに複数の日本の本職の芸者さんが参加していて、これらの史実について、和歌山大学の泉名誉教授が詳細な研究論文を公開している。2000年7月13日～30日に名古屋の大須演芸場で、オペレッタ『ゲイシャ』の公演が行われ、更にヘイフィッツ監督は、1945年に『日本の壊滅』という記録映画を製作しており、その際日本の歴史を相応調べたはずで、恐らくその史実を知っていたらしい。

いろいろ調べて、久しぶりにネットサーフィンの楽しさを味わうことができました。



2/15 『黒いオルフェ』の感想

- ・リオのカーニバルは情熱的です。今日のDVDはラブストーリーですね。燃えるハートが印象的です。とにかく凄いパワーある画像で圧倒されました。
 - ・サンバの試合に今週出ます。心で踊れる気がする。“オブリガード”
 - ・激しいサンバの中で、耳と目で楽しかった。
 - ・音楽とダンスがよかった。
 - ・音楽が良かったです。愛に始まり、愛に終わった。また、若者へと続く…。
 - ・シネマ・ド・リぶらを初めて観させていただきました。内容も奥深く音楽も新鮮でした。このような機会があり、感謝です。有難うございました！
 - ・知らない作品を知ること、観ることができる貴重な機会ですね。長く続けてください。
 - ・ちょっと、むつかしかったかな。仮面の男？ だれ？ なんでオルフェが死なないといけないのかな？
 - ・若い頃（20代）見た映画でしたが、年をとってから（60代）見ると、より良さがわかりました。“死”というものを意識するようになったからでしょうか。
- P.S. 『テス』をリクエストします。
- ・『ライフ・イズ・ビューティフル』を希望します。
 - ・生きることの悲しさが伝わってくる作品でした。

- ・リオのカーニバルで貧しい者と、そうでない者がいることを知った。外からパァーと見ると華やかだけれど、貧しい者は良いことはない。
- ・子供の頃にポスターを観てから57年後に映画を見ることができました。“オブリガード”
- ・昔観ました。今日改めてよく理解でき感動しました。
- ・とてもよかったです。昔観たのを思い出しました。
- ・空前絶後の大作で名品。大変感動、そして驚いた。何十年前に見逃したので大変良かったです。
- ・もうこの様な名作はできないのでは。



注意



上映中の携帯操作は、周りの方の迷惑になりますのでご遠慮下さい。また、観賞マナーを守り、終了後も明るくなるまで席を立たないようお願いいたします。上映開始時間を過ぎたの入場は、ご遠慮ください。

サロン・ド・シネマについて

ホールホワイエにて、寄付金でお茶菓子の提供をしています。映画の上映前にご利用ください。但し、「夜の部」には開催しません。

りぶらホールにはヒアリンググループが設置されています。補聴器を利用されている方は、Tモードに切り替えてください。



賛助サポーターとご寄付のご案内

賛助サポーターは、年度更新となります。総会のご案内と共に更新のご案内を同封いたしますので、よろしく願いいたします。なお、ご寄付は随時受け付けておりますので、スタッフにお申し出ください。

今後の上映のご案内 (★はレンタル作品。上映作品は変更になる場合があります。)

第 67 回	6 月 21 日 (木)	『踊らん哉』	① 10:30 ~	② 14:00 ~	③ 18:30 ~
第 68 回	8 月 23 日 (木)	★『この世界の片隅に』	① 10:30 ~	② 14:00 ~	③ 18:15 ~
第 69 回	9 月 20 日 (木)	『市民ケーン』	① 10:30 ~	② 14:00 ~	③ 18:30 ~

4 分間のピアニスト

VIER MINUTEN FOUR MINUTES 字幕上映



踊らん哉

SHALL WE DANCE? 字幕上映



5月17日 (木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

類いまれなピアノの才能を持ちながら殺人犯として収監され、刑務所の中でも手のつけられない問題児となった女囚と、彼女の才能に惚れ込み残り少ない人生を懸ける老教師、そんな2人の女性の魂のぶつかり合いを衝撃的に描く。来るべきコンクールでの優勝を目指し、厳しくも情熱をもって指導に当たるトラウデに、ジェニーも次第に心を開き始めるのだったが…。

監督・脚本：クリス・クラウス

音楽：アネット・フォックス

出演：モニカ・ブライブトロイ

ハンナー・ヘルツシュプルンク

スヴェン・ピッピヒ

製作：2006年 ドイツ カラー 115分

6月21日 (木)

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:30 ~

フレッド・アステア & ジンジャー・ロジャースの洗練された史上最高のダンスを堪能できるミュージカル。偽装結婚したカップルがケンカと誤解を繰り返しながらも次第に結ばれていく様を描く。8曲あるミュージカル・ナンバーはいずれも甲乙付け難いが、特にアカデミー賞にノミネイトされた『They Can't Take That Away From Me』とタイトルナンバーの『Shall We Dance?』は中でも傑出している。

監督：マーク・サンドリッチ

音楽：ジョージ・ガーシュウィン

出演：フレッド・アステア

ジンジャー・ロジャース

エドワード・エヴェレット・ホートン

製作：1937年 アメリカ カラー 108分